

利用や建築物がみられる。以上より、集落の立地はその発生時において地形や水などの自然条件によって規制されたが、現在は農業、土地利用、その地理的位置に影響される。

八ヶ岳北西山麓の農業土地利用

牛山 喜美子

(1) 目的

八ヶ岳北西山麓は最も進んだ高冷地農業地域と言われているが、冷涼気候と火山灰土壌はけっして農業に有利な条件とは言えない。この条件下で水稻栽培と、かつては養蚕業、現在に於ては洋菜栽培とが卓越している理由を、土地利用形態を視点として把握し、最終的には北西山麓全体の地域区分を行なうことを目的とした。

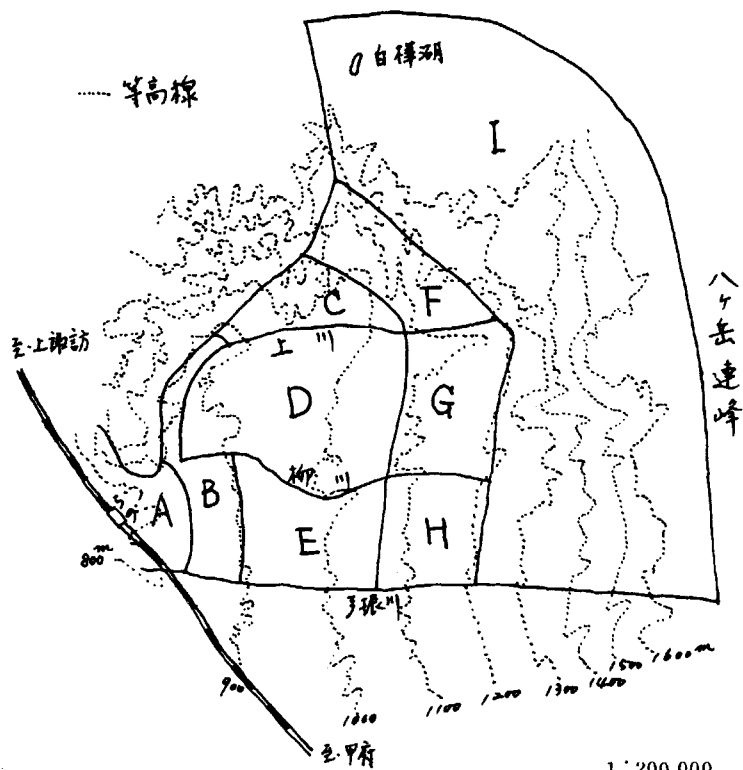
(2) 方法

研究方法は、文献研究に基礎を置き、現地での調査、観察、聞きとり、資料集めを中心として、これに実験を補足した。また論文構成としては、農業形態に於ける地域区分へ「自然」と「人文」の両見地から別々のアプローチを試みた。

(3) 結果

自然的見地からは地形、地質を指標として、地域の中央を西流する柳川を境に南の山浦地方、北の北山地方、更にその北、上川の谷床以北という区分が可能である。北西山麓ではすべての河川が西流するため、地形も自ら東西方向に細長い形状を示すので、この地形起伏に沿った南北性の稿状土地利用景観に特徴がある。

一方、人文的見地からは、
①水稻品種別作付限界線、
②農地転用と地価、③専・兼業率を指標としてとりあげた。この結果ほぼ等高線に沿った東西性の区分が可



八ヶ岳北西山麓の農業を中心とした地域区分

能となった。この結果を模式化すると、以下に示す様になる。

諏訪盆地部 → 非農村地域 → 中間地域 → 純農村地域 → 観光化地域
標高 700 m～ 800 m～ 900 m～ 1,000 m～ 1,200 m<

こうして自然的見地から得た南北性の区分と、人文的見地から得た東西性区分を総合したものがここに掲げた地域区分図である。Aが非農村地域、B.C.Eが中間地域、D.F.G.Hが純農村地域、そしてIが観光化地域である。

この地域の農業は今、諏訪工業地域との兼業化進行によって大きく変貌しつつある。「請け負い農業」「委託農業」という新しい形態の農業が生まれ、大規模専業と自給的兼業農業という両極への農民層分解が著しく進んでいるのである。

埼玉県大利根町における農業の地理学的考察

葛 原 奈緒美

(1) 目的

北埼玉郡大利根町は埼玉県の東北部の利根川沿いに位置している。大利根町の基幹産業である農業は水稲生産を主体として、近年裏作としてのイチゴ栽培が盛んになっている。また都心から50 Kmの距離にあるため兼業化の進展も著しいし、町の東部の栗橋駅近くの旗井地区では宅地化が進行しつつある。このようなごく平凡な農業経営地帯の大利根町の農業を通して、その地域性をとらえることを目的として研究を進めることにした。

(2) 方法

まず大利根町の農業構造を踏まえた上で、地形と土地改良という2つの視点からの考察を進めて行った。そこで見出された地域差が集落段階でどう農業に反映されているかを農業集落カードや土地利用調査・アンケート調査による資料を使って調べてみた。

(3) 結果

大利根町の位置は関東構造盆地の中心に当り、そのため古来利根川が乱流して自然堤防が発達している。このような地形に規定された自然堤防一畑・後背湿地一水田といった明瞭な土地利用の違いが長く続いた。これは自然堤防上では用水の確保ができなかったためであった。

一方、大利根町では明治以来4つの土地改良事業が実施された。それらは時期によりその内容を少しずつ異にした。戦前は後背湿地の水田地帯がその実施地域であったが、戦後は自然堤防地帯において基盤整備が行なわれた。これは戦後各農家の手によってなされていた畑に揚水して水田として利用する陸田化を安定させたとと言える。土地改良事業が支えた陸田化により、地形の違いを解消して、現在では水田率91%を示し土地利用的にも単一になった。

畑作物の陸稲が水稲に代わると共に、水田の裏作物としてそれまでの麦に代わって、昭和30年から導入されたイチゴが浸透した。イチゴ栽培も露路からビニールハウスによる施設園芸へと移行し、現在施設園芸農家率23%である。イチゴ栽培は排水条件が良いことから自然堤防地帯で盛んになっ